

【概要】

平成28年度 東京都自立支援協議会第一回本会議 グループ討議記録（2グループ）

〔2グループ出席者〕

海老原副会長（進行）、遠藤委員、河井委員、柴田委員、出保委員、西脇委員、古川委員

海老原副会長	地域の中で相談しやすい人（いい相談支援専門員）をどのように育てているかについて、自己紹介もかねて具体的にご紹介願いたい。
○	<ul style="list-style-type: none">・市の基幹相談支援センターから来た。・相談支援専門員の人材育成としては平成24年から勉強会を開始。自立支援協議会の中で地域の相談支援専門員の質の向上を図ろうということになり、当初は2か月に1回程度やっていた。・地域の相談支援専門員からのいろいろな困りごとや、見慣れないサービス利用計画の作成等についてみんなで顔突き合わせて検討したりした。一人の相談支援専門員、一つの機関だけでは抱え切れないものについては事例検討という形を用いてみんなで検討しあったり、スーパーバイザーの先生をお招きしているんな視点での助言をもらったりしている。・地域の相談支援専門員から今のサービス利用計画のシートでは書きづらいという話が出て、みんなで話し合って市独自のサービス利用計画の様式を作った。・四年経ち少々マンネリ化してきて、また、相談支援専門員も入れ替わりがあり、もっと若い人にもこういう勉強をしてほしいと、毎回新しい人にも来てほしいとお願いしているが、現場の人は普段の相談業務とモニタリングをやっていて、会議に出るのも大変だということで、今の取り組みをいい形で続けていくためにはどうしたらいいのかと悩んでいるところ。事業所によっても考え方が違って、積極的に参加してくれるところもあれば、業務優先というところもあり、なかなか難しい。・市（障害福祉課）と委託の相談支援事業所3か所（身体・知的・精神）が中心に勉強会の企画をしている。・スーパーバイザーは精神科のドクターや保健所の保健師、当事者で相談支援をしている方、大学の先生など、それぞれ相談支援専門員からどんな人がいいか聞いて呼んでいる。その先生も底を尽きかけてきた。・皆さんからは、自分にはない視点があるので、支援の幅が広がったし、困ったときに自分の事業所以外に相談できるのは安心すると言われている。事業所を超えて横のつながりができたのはよい。ヘルパーが見つからないという話はよくあるが、勉強会をきっかけに、あそこは空いているとか、ここは〇〇さんに聞けばいいとか話せるようになった。
○	<ul style="list-style-type: none">・障害児者を持つ保護者の団体の代表で、市の自立支援協議会の会長をしている。・当市には基幹相談支援センターがなく、市もなかなか作る気がない。・市は計画相談が遅れていて、かなりの割合がセルフプラン。自立支援協議会の中で、セルフだとモニタリングが発生しないので、計画の良し悪しの判断が難しいから、人手が整ってきて余力ができたならセルフプランの人もきちんと計画相談できるように体制を整えてほしいと言っている。計画がきちんと客観的な目でそれが妥当なのかどうか、本人の独りよがりになっていないか、チェックすることが必要。・時間が限られた中で計画相談の人が増えてきたということで、質をどう担保するかということは自立支援協議会の相談支援部会の中でも協議してきて、平成27年度から計

画相談をする人の連絡会が発足。市の保健師が呼びかけて月1回事業所が集まって情報交換をしている。詳しい内容は分かりかねるが、質のばらつきがないように底上げができるように情報提供をしていると聞いている。

・近隣市の前にいた名物部長が「いろんな支援をする人がいるが、重なる部分が必ずある。そののりしろをどうやって大きくするかを私たちは考えないといけない。」と言っていたことが頭に残っている。ここで切れて、こっちとこっちはっきり分かれるというのではなく、おたがいに重なる部分をきちんと確認して、その部分を両方がちゃんと支えることでその人の全体的な支えになるという、こののりしろを大きくするというのをぜひ実践してほしい。

・相談支援事業所は十数か所だが、相談員が1人～3人と少ない。精神は委託のところが中心になり、社協がやっている相談支援センターは人手もあるので、知的・身体・児童のかなりのところをやっている。あとは、ポロポロポロという感じでなかなか進んでいないと感じている。

・市のケースワーカーが若い方が多く、一般職で入ってきた人がケースワーカーになっていることが多いので、結局、経験のある人のところに全部話がいつてしまっている。そうなるとこなせる件数が少なくなるし、もう少しケースワーカーの専門性、最後に支給決定するのは市なので、底上げを頑張してほしい。一生懸命話を聞いてくれるが、気の強い親の言いなりになっちゃうというのを聞いたりもする。

・市内ですずっと相談員をやっていると限られた部分の知識に偏ってしまう。自分は親の会の上部団体にもつながっているのだから、例えば23区にこういう施設ができたよ、こんなことやっているなどと相談員に情報提供することもある。みんな忙しくて情報をとることが難しい。親の横のつながりは結構あるので、もっと使ってほしい。ヘルパー事業所も、親の口コミで、あそこの事業所は一生懸命やっているなど、そういう情報は水面下で伝わりやすい。いいことも悪いことも。

・親の会と相談支援専門員・事業所とのつながり、情報交換は少ない。顔を合わせるのには自立支援専門協議会の全体会とかになるが、全体会は専門部会でやったことの確認ぐらいなので、つながらない。

○ 都の障害者施策推進部地域生活支援課長。

・先ほど情報提供で説明した基幹相談支援センターのマニュアル作中で、相談支援専門員の質の向上に各事業所苦しんでいることが分かった。基幹は、相談支援専門員の質の向上のため、研修をしたり、困難事例の相談を受けたり、横の連携をつなげたりという役割がある。

・検討会に参加した4か所の基幹は割合早い段階で立ち上げており、今言ったような中身についてはやっている状況。

・立ち上げて日の浅いところは横の連携をつなげるような作業までいっていない。正直言ってある程度年数かけないと。立ち上げた当初の所は前例がない、少ない中でやっているのだから、どういう形で基幹が地域の中核になったらいいのか試行錯誤しているところ。

・検討会で取り上げた4か所も当初はどこから手を付けたらいいのか戸惑いながらやっていたと。やはりある程度年数かけないと難しい。

・とはいえ、試行錯誤しながらも一步一步進めることが大切。いきなり100%の連携はできない。人材育成にしてもいきなり100%素晴らしい人材育成策ができることはない。行政と相談支援事業所・専門員が自立支援協議会と共同作業で一步一步積み上げていくしかない。

・プライベートな話として、社会福祉士としてボランティア活動しており、社会福祉士同士で定期的に集まって学習会をしている。

	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマはいろいろ。専門職同士の集まり、実はいろいろあるが、行政と直結しているケースもあれば、つながっていないケースもある。自分が関わっているところも全くパイプがないわけではないが連携してやっているわけではない。 ・行政が掴んでいない所で質の向上のための活動や勉強会を専門職団体、当事者団体が地元でやっているの、それらを行政がいかにかすく上げていくか。単発の地道な活動を行政がつなげていく、活かしていくと効率的な質の向上策になるのではと思う。
海老原副会長	<p>当市は基幹がなく、具体的な計画もない。何やったらいいのかわからない状態で基幹を作る意味が分からない。たとえば人材育成のためにはこういう内容が必要とか、横のつながりを作るためにはこういう事務局の仕事をする人が必要とか、具体的にどこかやらなくてはというものがあって、そのため基幹を作ろうというのであれば迷うことはない。立てなきゃダメって言うから立てようか。というのはもったいない。なぜ基幹を作るのか。</p>
○	<ul style="list-style-type: none"> ・国が基幹をどういう位置付けで出したのかは都もはっきりわからない。 ・しかし、去年検討会をやっていて、黙っていても横の連携はできない。どこかイニシアチブとらないと。 ・専門員の質の向上を図ろうと思っても、小さい事業所が多いので研修も自分たちだけではできない。どこかがイニシアチブをとって横の連携を作ったうえ、共同でやらないと難しい。 ・イニシアチブをとるのがどこかという時に、行政がとるのも一つだが、行政は給付費決定を行うところなので、そこが直接やるということも中立性の観点からどうか。そういう意味で、基幹は横の連携を作るための別な中核的な組織として必要。 ・実はアンケート結果でも「そもそも基幹ってなんなの？」という意見は結構あった。そもそも基幹はどういう役割を果たすべきなのか、それが他では果たせないということであれば、やはり基幹を作って横の連携、事業所同士が気軽に話せる場を作る、あるいは研修を共同で開催するイニシアチブをとることが必要になるかと。 ・正直に言って、今回このマニュアルを作ったのも区市町村がそもそも基幹を作る意味が分からないという声があったから。これですべてが判るというわけではないが、すでに立ち上がった事業所を取り上げているので、こういう意味で必要なのだという事例と認めていただければと思う。
海老原副会長	<p>横のつながりができると視点も広がるし、自分の持ってない情報も得られるので大事だと思うが、逆に事業所同士でちゃんと相談できて連携して横のつながりができてイニシアチブをとる団体があれば基幹はいらないということか？</p>
○	<p>そういう形が自発的にできれば、それが基幹ということではないか。</p>
○	<ul style="list-style-type: none"> ・市の障害福祉課長。当市は人口も少なく、あまり言いたくはないが、やはり規模の点から十分ではないことも正直ある。 ・先ほど耳の痛い話があったが、今年、ケースワーカーに新人が入った。昨年も職員10人のうち5人が異動。自分も2年目。新人も頑張っているし、指導している。 ・情報提供できる話はあまりないが、市では計画を見たときに職員がこのレベルはどうかとチェックしている。 ・計画相談は全体の数字をあげたいのもあるが、やはり質も気になっている。 ・相談支援連絡会を立ち上げて事業所を集めて、年3回程度情報交換等を行いながら横の連絡をしている。規模が小さいのでたくさんの事業所あるわけではなく、利用者側の選択肢が少ない。(利用者や相談支援専門員の)相性もあるので、合わないと相談支援自体が進まなくなってしまう。

海老原副会長	市のケースワーカーが上がってきた計画を見てチェックするということだが、なんか違うなという場合は返すのか？
○	そう。さすがにこのレベルの記載はちょっとというものはというのは作成し直していただく。計画としてもモニタリングとしてもどうなのだろうと。そんなに強くいうわけではない。紙に書き込む作業、つまり作成できることと実際のところのズレはあると思うが、書き込めない人の資質はどうかと思う。
海老原副会長	この計画はうまくないなという根拠は？ケースワーカーは相談支援専門員の研修を受けているわけではない。書式もかっちり決まっているものでもない。最終的には利用者が困ったときに相談したいとか、今後こういうサービス使いたいけどどうかとか相談しやすいかどうかが一番大事だと思うが、それは書類を見ながら、そういう連絡会に関わりながらだと思うが、ケースワーカーがジャッジする根拠は。
○	そこまでジャッジするわけではない。作成と資質がイコールではないが、あいまいさがあつたりした場合は、計画書として十分ではないのではと判断する。否定するわけではない。先ほどの資質の問題と一致することではないが重なる部分もあると思うので、やはり最低限記入できることは必要。人よっての偏りもある。
○	当市も、計画上がってきて（チェックすると）真ん中がすっぽり空欄だったりとか一行だけだったりとかある。相談支援専門員だけで考えてまとめてしまったりとか。前はいちいち返していたが、返したことでケースのこと知りえた部分もあるが、返してばかりいると書けなくなっちゃう。今100近くあるがセルフプランが半分くらい。でもみなさんしっかり書いてくれるようになってきたので、相談支援専門員の方も経験を積まれて、いい感じで成長しているのかなと思っている。
○	<ul style="list-style-type: none"> ・知的の当事者委員 ・計画相談はしたことない。 ・普段の生活で困ったときの相談は親や福祉の人に。 ・福祉の人は区の「たまり場（毎週金曜日開催。15人程度集まり、ゲームやおしゃべりをする）」の職員。 ・相談しやすい人は、よく話を聞いてアドバイスをしてくれる人。福祉のことなど、いろんなことをたくさん知っていてほしい。 ・いろんなことを知っていてほしいので、横のつながりがたくさんあって自分のことをみんなが知っているのはいいと思う。
○	<ul style="list-style-type: none"> ・区の障害施策課長 ・基幹相談支援センターとうたってはいるが、実質基幹の機能（成年後見センターのみ別部署）を有している。 ・スタッフは常勤非常勤入れて70人くらい、子ども発達センター入れて120くらい。 ・区ではサービス等利用計画を作る時にセルフプランを作らないということを大前提にやっている。2000件超えていて、セルフは2件。100%セルフはなくそうと言っていた。セルフプランはその後のモニタリングをするしないという話に戻ってくるのでその人の状況が見えなくなってしまう。 ・セルフを作らないためにはどうしたらいいのか、やはり相談事業所を増やそうということで、都から指定を受けて初任者研修を年2回やっている。去年一昨年とやっていて、30、40人くらい受講している。 ・また、高齢障害者の問題として、いずれ65歳になって介護保険に移行してケアプラン作らないといけなくなるということで、ケアマネも障害特性を知らないとケアプラン作れないというのがるので、初任者研修になるべくケアマネも入れていこうというこ

	<p>とで受講生の半分以上がケアマネ。そんなことで今相談事業所が30幾つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次の課題が現任研修。今年取り組もうと、どうしたらいいかと都と話をしているところ。今年度末までに一度やりたいが。誰にお願いしてどういうふうにかリキュラムを組むか。初任者は区の職員や学識経験者にしてもらっているが、現任研修はノウハウが難しいので探しているところ。なんとか今年一回はやりたい。 ・サービス等利用計画の作成研修会では、区が招集をかけて、半日程度研修会を開いて、情報提供、ポイントポイントお願いしたいこと、事例紹介、よりよい計画の書き方とかを指導している。 ・相談事業所の立ち上げ支援は、開設して間もないところでどういうことに困っているか？不安があるか？の確認や、計画作成時の注意点とかを情報提供。なにをどういうふうにやっていいかわからないところが多いから、その部分のノウハウを伝える。 ・横のつながり大事ということで懇談会もやっている。 ・ただ、さっきも話があったが、相談支援事業所は一人二人でやっているのではなかなか出てこられないのが課題。みんな集まれない、ということは情報も偏る。事業所の意識が高いところは出てきて情報いろいろとっていくけど、計画で手いっぱいのところや一人のところは出てこられないから質が変わる、温度差あるというのが課題になっている。 ・支給認定会議でサービス等利用計画見ていると、障害のある方がどういう生活を望んでいくのかや将来的なことを書いていく項目がちゃんと書けていなかったり、親が大変だからと親のことを書いていたりするところは、返してこれは本人の目的じゃないよねと言ったりする。ただ、せっかく聞き取りして本人と話して書いたものだからこれをお願いしますと言われて、その問答が担当は危惧している。 ・自立支援協議会は相談支援員というよりも、区の相談支援をどうしようかということがメインでやっている。協議会には相談支援専門員の人達もいるので、悩みを話してもらったりはしているがメインではない。
海老原副会長	<ul style="list-style-type: none"> ・当市には相談支援事業所7か所あって、それぞれに専門員が2, 3人いる。 ・月に一回自立支援協議会の相談部会として集まっている。精神の委託事業所が中心になって、相談支援の質について話をしている。 ・2, 3年、書式や市の相談支援の方向性の話し合いをずっとしてきたが、障害を持った人がどういう生活をしたいかというのも大事なのだが、最終的にはインクルーシブ社会だろうと。施設に言えない、地域の中でどうやって生活していくか、親亡き後をどう考えるか、本人の希望をどうやったら引き出せるか、ということを経験支援のスキルとして何をどう身に付けていくかというような議論をしている。 ・毎回行っている事例検討のルールを決めており、相談支援専門員が計画を作るときに何に困ったのか、困ったことをちゃんと出す。困っただけでなく、自分はこうしたいと思うけど、どうかという提案型で出す。それに対してみんなから意見をもらって、では次回のモニタリングでこうしてみる、こういう対応してみるなど、ちゃんと結論を持って帰ろうということ。 ・市の中だけで話しているとだんだん視野が狭くなるだろうと、近隣市の相談支援専門員とつながろうと、去年から情報交換（飲み会）をしている。困っていることや書式のこと、知的の人の自立をどうサポートしているかなど。当市にない資源があったり、全然知らなかった視点があったりスキルがあったり、すごく勉強になるので、それを当市でもどうにかできないかということを企画して全体会にあげたり、提案したりしている。 ・すごく保守的な地域なので、利用者全般自分のニーズをすっと言えなかったり、いろんな支援者に気を使って本当は自分はこうしたいと思っても言えなかったりするので、どうしたらうまく引き出せるのか、信頼関係作っていけるのか、当事者向けの研修

	<p>会を相談部会主催でしたりしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域資源をどうつながっていくか。知識がないと、いろんなこと知ってないと相談してもらえないと思うので、地域にある資源を知ろうと、子ども家庭支援センターや保健所の人に来てもらったりして勉強している。 ・月に1回の部会のほか、勉強会、研修会、講演会など入れると年に15、6回集まってやっている。 ・計画の書式についても、ここはもっとこういう視点入れた方がいいのではないかと相談支援専門員がお互いの中でやっている。 ・行政とはあまりつながっていない。行政はなんとかうまくやってくれとまかせっぱなし。自分たちの中でお互いのやり方を注意しあったりして研鑽している。 ・年度の最後に、「地域課題 今年度気づいたこと」とまとめて、全体会上げて提案書をだす。生活部会や就労部会に投げるものもある。「計画を作っていてこういうことに気が付いた、生活部会で検討してみてください」など。そういうつながりもある。
(休憩)	
海老原副会長	<p>皆さんからいろんなご意見・情報もらったが、いいなと思うことやこれはどうなのよとか、意見交換をしたい。もう少し詳しく聞いてみたいとか。</p>
○	<p>基幹が行政ではなく行政の手を離れていて、独立して中核的になっているのがいいなと思う。行政が入ると行政の視点で考えてしまうし、国・都・区の予算とか考えてフィルターかかってしまう。当区はちょっと特殊なのでそこに大転換するのは難しいが、そういうコンセプトは大事にしたい。</p>
海老原副会長	<p>今まで基幹で完全に民間がやっているところはあるのか？</p>
○	<p>基幹は実施主体が区市町村に限定されているが、委託（民間）でやっているところはある。直営でも給付決定とは違う部署でやっているところもある。やはり一緒なのはさすがに中立性がどうかと。特に国の縛りがあるわけではないが、委託という形で実践をやっている民間にお願いするのは一つのいい手法かと。</p>
海老原副会長	<p>民間に委託されたところでいい研修をしているとか、ちゃんと機能しているかのご紹介はあるか</p>
○	<p>小金井市と世田谷区。特に世田谷区は力を入れている。先ほど話があったが、世田谷区も指定を受けて（初任者研修）やっている。人材の育成に力を入れている。</p>
○	<p>相談支援専門員増えない、事業所も増えない。撤退はあるけど。どうしたらいいのか、初任者研修やるのがいいのかと思ったり。</p>
海老原副会長	<p>都もずいぶん初任者研修やっているけど、なかなか増えない。事業所も。現場の感覚として何が嫌なのか？</p>
○	<p>当市の初任者研修修了者119名と資料に書いてあるが、実際にはそんなにやっている人いない。研修受けてもやってないという人がすごく多い。なぜやらないのかを明らかにしないと、いくら研修しても実際の計画には結びつかない。</p>
海老原副会長	<ul style="list-style-type: none"> ・報酬単価だけではないと思う。なぜか。先ほど話が合ったように、業務に追われて研修に出られないとなっているとモチベーション落ちてくる。 ・自分の所だったら、業務より研修行っていると言うけど。計画一か月遅れても支給決定止めるということはない。 ・計画相談の大事なことは、障害を持っている方が自分の生活における課題を自分で整理して納得して、こういうこと取り組まないといけないなとか、将来のこういうこと困るだろうなという見通しを立てられるようにするのが大事だと思うので、その時その時

	の支給決定がどうのこうのとはそんなに重視していない。それは他の場所では難しいのか？業務優先の事業所というのはどういう気持ちで業務優先なのか。
○	基本的には利用者側のオーダー。いつ計画だしてくれるの？いつうちは支給決定なの？そういう突き上げがある。認定会議は月2回ぐらいしかないから、ずれていくと…。当区は認定をしてから支給なので、色々なケースあるけど、利用者側、特に保護者からいつなの？いつなの？と早く上げてほしいと言われる。
海老原副会長	研修自体に魅力がないと言われることは？
○	マンネリ化してきたかなとは。
海老原副会長	それはその時その時でその時点にいる相談支援専門員がすごく困っていることを取り上げては？拾い上げが難しい？
○	事例検討も当番で回していたが、最初は出してくれるけど、段々、ケースがないと言われる。すべての事業所ではないが。
海老原副会長	当市ではいいケースも募集している。「いい計画作ったぜ、みんな見てくれ。」みたいな。困っている事例と合わせて自慢したい事例も出してくれと。本人はすごくよくやったと思っても、他の人から見るとこの視点足りないのではとか絶対出てくる。そうすると満足してそこで達成じゃなくて、もっとここ伸ばさないと、このスキル身に着けないと、とお互いに監視しあえる。好事例というのものなかなかいい。
○	ケース会議は結構やっているのか？個別支援会議。事業者が忙しくてなかなかできないと聞いている。一か所に集まって、この人のここが大変なのだよ！と、なんとかみんなで知恵を出し合う場なのだけど、それができないという。
海老原副会長	すごく困っているときにはちゃんと集まってやるけど、ほとんどやっていない。電話や個別に聞いたりして終わっている。サービス担当者会議とか。
○	今まさに困っているとか早く決めないといけないという時は集まることもあるけど、電話でやり取りするのがほとんど。
海老原副会長	特にサービス提供事業所は時間がない。
海老原副会長	こういうこと将来的にやりたいとかあるか？現任研修やりたいとかすごくいいと思うが。こういう研修やってほしいとか、ここが課題とか。
○	<ul style="list-style-type: none"> ・今さっきおっしゃったケースの個別調整会議、そういうのが開かれることあるわけで、それを題材にどうの時にそれを開かないといけないか分かってもらうために事例としてだしてみるのもいい。気軽に聞いていいのだとか連携しなきゃいけないのだとかわかってくると思うので。 ・一番大きいのは他の業種との連携をどうやってとったらいかわからない。行政も音頭とるだけじゃだめだと思うので、連携の仕方のノウハウが伝わるとよい。 ・何かを授けるではなく、みんなで作り上げるみたいなのが実利があると思う。
○	先ほど委員がおっしゃった、いっぱい知っている人がいいアドバイザーということ。今の時代、障害だけでは解決しない。医療、貧困など、色々な業種の人と連携を組めるような研修を模索していかないと。この先相談支援専門員が障害の関係の知識だけを身に着けても解決は難しい。色々な業種の人と組んで研修をやるような形を考えていかないと。
海老原副会長	<ul style="list-style-type: none"> ・他の業種の人にも新鮮。こんなことができるのかと。 ・初任者研修のシンポジウムのコーディネーターをやっているが、パネリストの人がヤクルトのお姉さんまで使えと。ちょっとゴミ捨ててほしいとか、ちょっと落ちたもの拾

	<p>ってほしいとか。そういうのを牛乳配達とか新聞配達の人とか、そういう人まで巻き込んだ方がいいと。それくらいの感覚で計画にはヤクルトを盛り込め！と。なるほどとなった。</p> <p>・相談支援専門員はだんだん福祉のことにぎゅっと視野が固まっていくというか、どの制度を使うかということになりがちだが、地域の中にある他の資源をうまく使えるかというのは大事な視点。</p>
	<p>○ 地域での包括、高齢だけでなく全部含めての、貧困とかも含めて話し合えるような地域のネットワークづくりが次のステージかなと。</p>
海老原 副会長	<p>コーディネート大変そうだけど、機能したら本当にすごいと思う。</p>
	<p>○ 今、区で検討しているのが困難事例をバックアップする機能。サービス事業所や相談事業所が困ったものを集めてコーディネートしていくような部署を作ろうかと。障害の家庭は、認知症や貧困の問題もでてきて障害だけで解決するものでない。そういうところをもっと幅広くやっていって、相談支援事業所の方もみんなある程度の知識を持っていて、全部を負わなくてもどこかにつなげばいいと、そういうチャンネルというか引き出しをもっている、そういう連携のシステムができるといいと思う。</p>
海老原 副会長	<p>壮大な夢を。それが基幹というならよく分かるけど。相談支援事業所だけだとそこまでできないし、だれかコーディネートしてほしいというのを。今の制度だともうちょっとかなという気がする。</p>
	<p>○ そう、まだまだこれから。</p>
海老原 副会長	<p>今、障害者に関係する人たちだけじゃなくて、銀行の人や病院の人や地域のその辺にいるおじちゃんおばちゃんとかが、そういう人ともちゃんとなつながつて困ったときにみんなが助けてくれる仕組みができたほうがいいなという話があったがどう思うか？</p>
	<p>○ いいと思う。</p>
海老原 副会長	<p>では2グループはそのような意見が出たということで。</p>
(終 了)	